

## ストリートチルドレン・働く子どもを対象とする インドのNGO活動の理念と実際 － NGO バタフライズの活動－

中嶋 裕子<sup>1)</sup>, 中島 友子<sup>2)</sup>

### The Ideological Principles and Practices of an NGO Supporting Street and Working Children in India － The Activities of the NGO Butterflies －

Hiroko NAKAJIMA <sup>1)</sup>, Tomoko NAKASHIMA <sup>2)</sup>

It is estimated that there are approximately 100 million street children in the world and that the majority of them live in India. However, their lifestyles and circumstances are not well-known or have not been thoroughly researched.

There are more than 700 NGOs in India supporting street and working children. They provide them with education and shelter, among other things. However, many of these NGOs tend to treat them as children who need protection rather than those who have the power to appeal to society to change their harsh circumstances.

The author visited Butterflies, an NGO in India. They regard children as independent beings who have the right to decide and manage their activities themselves. They put children in the center of their projects and try to develop their abilities.

This paper reports on the ideological principles of Butterflies, their activities such as establishing the Child Labor Union, and publishing wall newspapers to advocate for changes in society such as the acknowledgement of a universal right to survive. In addition, the paper reports on the opinion of children involved in Butterflies' activities.

**Key words** : Butterflies, NGOs in India, street children, working children

バタフライズ、インドのNGO、ストリートチルドレン、働く子どもたち

#### はじめに

インドのストリートチルドレンや働く子どもたちの人数は世界最多とされている。現在もその数は増加し続けており、被虐待、非行化、薬物依存などの問題は拡大する一方である。しかし、生存に関わる問題を抱えている

これらの子どもたちの調査は「比較的新しい試み」<sup>1)</sup>であり、彼らの現状はほとんど知られていない。子どもたちの声を聞く必要性が認められながらも実際にはその機会は限られている。

国内論文検索ソフト CiNii で「ストリートチルドレン」、「こども・労働」を検索した

1) 福山平成大学 (Fukuyama Heisei University) 〒720-0001 広島県福山市御幸町上岩成正戸117-1

2) 近畿医療福祉大学 (Kinki Health Welfare University) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

ところ日本ではインドのストリートチルドレンに関する論文は2000年以降数えるほどしか発表されておらず、内容も一つの NGO の紹介と数名のストリートチルドレンのインタビューに限られていた。ストリートチルドレンを支える NGO 運営の指針となる理念や活動についても多くは言及されていない。

筆者は、1998年にデリーにおいてストリートチルドレンや働く子どもたちを対象に活動している NGO であるバタフライズを視察する機会を得た。本稿では、子どもを主体とした支援の方法について多くの示唆を与えると考えられるバタフライズの活動理念、活動内容、その活動を支えるスタッフの思想や、参加している子どもたちの声などを報告する。

## 1. ストリートチルドレンの定義と現状

### 1) 「ストリートチルドレン」の定義

「ストリートチルドレン」の概念については、1980年代にその規定が試みられたばかりである。ユニセフでは「ストリートで過ごす時間やそこで生活するに至った理由は関係なく、都市のストリートにおいて働いているすべての子ども」とし、表1に示すように3つのカテゴリーに分類している。また1982年にジュネーブで開かれた国際子どもカトリック会議では、「自分の家族から離れて生活し、

ストリート、空き家などが広義の意味での実質的な家となり、成人による保護や監督を受けていない状態にあるもの」と定められた。

しかし現在に至るまで、ストリートチルドレンの統一された定義はなく、研究者や政策施行者などによって異なっているのが現状である。

本稿においては、国際人道問題独立委員会による「街頭にいる子どもや青少年のことで（専用に使われていない住居や廃地なども含めて最も幅広い意味での）街頭を常駐のすみかにして、適切に保護されていないもの」と定義する<sup>2)</sup>。

### 2) ストリートチルドレンの現状

ストリートチルドレンは目に付きやすい存在であるが社会的にその存在が認められることはなく住居や教育の提供、相談援助など必要な対応がなされていない。

表1にも示したようにストリートチルドレンの全てが親と同居していないというわけではない。また路上生活であっても、家族と接触があり、くず拾いなどによって得た収入の全てを家に入れる子どももいる。しかし、デリー駅やバスターミナルで荷物運びをしている子どもたちの多くは、一人で生活している。

インドにおけるストリートチルドレンの数についての正確な統計は無いが、デリーだけ

表1 ストリートチルドレンの分類

路上で過ごす子どもたち (children in the street)	保護者があり、昼は路上で働き、夜は家庭に帰る子どもたち。 家はあるが家族を助けるため一日中路上で働き暮らす子どもたち。
路上で暮らす子どもたち (children of the street)	何らかの事情により路上生活をしており、親との関係は僅かながら維持している（親の所在はわかるが、ほとんど戻らない）子どもたち。 家族と一緒に路上で暮らす子どもたち。
	孤児または、捨てられた子どもたち。

国際人道問題独立委員会（日本ユニセフ協会訳）『ストリートチルドレン 都市化が生んだ小さな犠牲者たち』草土文化 p31. 1988より作成

でも10万人以上いると推計される。彼らのほとんどは農村地区出身で、家庭の絶対的貧困や家庭での暴力、性的虐待など悲惨な現実から逃れ、生きる糧を求めて都会に出てくる。しかし都会で拠点を見つけるのは難しく、結果として駅や路上での生活になるため安心して身を休めることもできない。警察や市民からの日常的な暴力にさらされ、治安を乱すという理由で連行されることもしばしばである。負傷、罹患しても治療を受ける術もなく重症化し死に至る場合もある。また、性的虐待の被害者になることも多く性病にも苦しむ子どもも少なくない。さらに寝場所も食物も仕事もないため、スリや盗みを働くマフィアの手先になり、薬物に依存した生活に陥ることも多い。

収入を得る方法としてはくず拾い、食堂での雑用、荷物運び、靴磨き、物乞いなどがあるが、継続的な就業は望めず日雇い労働に従事する他ない。このように子どもたちの多くが僅か10ルピーから25ルピーの賃金を得るために毎日10時間から15時間働いている。

## 2. NGO バタフライズの概要

### 1) 団体概要について

インドにはストリートチルドレンや働く子どもたちを支援しているNGOが700ほどあり、その多くは子どもたちに教育やシェルターを提供する活動をしているが、子どもを受益者とししか見ていないものが大半である。しかしその中で子どもを権利の主体者と見なし「子どもの参加」を最大限に保障するNGOも増えてきた。その代表的なNGOの1つがバタフライズである。バタフライズはデリーを拠点にストリートチルドレンのために活動している団体で、1989年にリタ・パニッカによって設立され、現在約500人の子

どもと関わっている。バタフライズというNGO名はストリートチルドレンたちが、1つのところに定住することなくあちこちと漂い、さまよい歩く命の短い蝶と同じであることから名づけられた。

バタフライズは、駅やバスターミナルなどストリートチルドレンが集中して働いている8箇所のコンタクトポイントを拠点として活動を展開している<sup>3)</sup>。スタッフの中には元ストリートチルドレン出身者もいるため、ストリートチルドレンの感情や習性、活動拠点を的確に把握し対応している。

### 2) バタフライズの基本理念

バタフライズの活動の根底には子どもの持つ能力と可能性への絶対的な信頼がある。子どもを大人と同様に権利を所有する存在と捉え、さまざまな決定事項への「参加」と「発言」を重視している。「参加」と「発言」を通じて子どもたちが自尊心を育み、社会的な適応力も身につけることを期待するためである。

バタフライズの目標は、子どもたちを搾取や虐待から守ること、そして社会に問題意識を突きつけていくことである。そのために子どもを対象にした直接的な援助活動だけでなく、出版・リサーチ・政策提言・ネットワーク作り・子ども会議への参加・マスコミや国会議員への働きかけなど、様々な社会活動を展開している。

また、彼らは子どもが働くこと自体を否定していない。現実的に働かねば生きていけないため、働く機会を奪うのではなく、その環境を整えることを優先課題としている。

### 3) バタフライズが関わっているストリートチルドレン

筆者がコンタクトポイントの1つであるコンノートプレイスで出会った子どもたちは約

20名で、出身地はビハール、ネパールなど様々であった。家族と同居していない子どもはコンノートプレイスや他のコンタクトポイントであるパリカバザールで寝起きしていた。ストリートチルドレンとして生活している期間については1ヶ月が2名、2～3ヶ月が4名、4ヶ月が1名、8～9年が2名であった（全員が挙手したわけではない）。

仕事は、ゴミ拾い（9人）、竹笛売り（2人）、手工芸（2人）、ハンカチ売り、車窓磨き、屋台菓子売り、家事手伝い、アルミ皿作り、果物売り、スプーン売り、結婚式の掃除、御茶屋、靴磨きなどで、一日の稼ぎは10～20ルピー（2人）、20～25ルピー（2人）、40～50ルピー、70～80ルピーであった。

### 3. バタフライズの活動の特徴と子どもの権利

バタフライズの特徴は「子どもを権利の主体者とみなし子どもの参加を最大限に保障する」ことで、子どもが主体となって活動の全てを計画し、実行・評価を行うことである。

なおバタフライズでは、子どもの権利条約で保障されている権利の中でも①学ぶ権利、②自由に物事を決定する権利、③経済的な搾取から守られる権利（子ども労働組合の設置、子どもによる自分自身のための貯蓄）、④健康を守る権利（保健チームの設置、子ども自身による運営）、⑤虐待を受けない権利（児童虐待の禁止）を重視している。

そしてこれらを保障するために行っている主な活動が、①教育の機会提供、②子どもの組織化（彼らを組織化し、人間としての尊厳と存在、生活を守る）、③世論喚起（子ども、児童労働、ストリートチルドレンに関する一般の人々の理解を促進し、政策や社会の変換を目指し世論を喚起する活動）、④その他子どもを守るための活動、である。次に各活動

の内容を記す。

#### 1) 教育の機会の提供（資料1を参照のこと）

一日中働かねばならない子どもたちにとって職場から離れたセンターに通うことは非現実的であるため、8つのコンタクトポイントで学びの場を提供している。そこでは主に教育に携わるストリートエドゥケーターや主に相談や運営に関わるが教育にも携わるスタッフが一方的に教えるのではなく、学びたい子どもが彼らの周囲に集まり輪になって学ぶ形式をとっている。また、子どもたちの様々な相談にも応じられるように配慮している。

そこでは正規の学校に通えない子どもたちのために、生活に必要な読み書きや、算数の習得を目標としたプログラムを用意している。レベルごとに目標は異なるが、準備段階は幼稚園レベルから始まり、初級レベルは学校教育の1～2年生程度、上級レベルは学校教育の3～5年生程度であり、最終的に5年生レベル迄の知識とスキル、態度などの習得を目指している。

1日に約3時間で、週5日学ぶ。文字の読み書きや計算、健康などを勉強する他に創造性や人格の向上、協調性を身につけるため、絵画やゲームなども取り入れている。社会研



写真1 駅での学習風景

NGOのサンスカール主催。子どものエプロンは活動中にID代わりに着用している。



究として、遠足などのレクリエーションを通して子どもの社会性を高めるプロジェクトも行い、その他「子どもの権利」についても学習している。

## 2) 子どもの組織化

子どもの組織化とは、子どもたちが協力し団結することで自分たちの抱える問題を自ら解決できるように、その環境を設定するものである。バタフライズでは子どもたち自身が運営を行うという原則を敷いているため、活動計画や評価だけでなく資金の使い方も子どもたちによって決定され、スタッフは集合場所の確保や進行の見守りなどの役割を担っている。以前はスタッフが全てを決めていたが、大人が考案したものと子どもが実際に必要とするものとが乖離していたため、子どもたち自身の決定を尊重する方針に変更した<sup>4)</sup>。

### ①子ども評議会

バタフライズでは月に2回子どもが議長を務める「子ども評議会」を開いて、自分たちの抱える問題を話し合い、現在行われている活動を批評し、将来の活動を計画する。月に1回拡大子ども会議が開催され、各活動地域の代表が集まってミーティングを開き、討論する。拡大子ども会議では、デリーの子どものことだけでなく世界の同じような境遇にいる子どもに関する問題をも討論し、連帯の必要性とその方策や、問題の解決策を考えている。

筆者の訪問時の議題は、デリーでウェイトレスとして働いていた少女が皿を割ったことで雇用主に暴行を受けた事件に関するものであった。この件を告発すべく子どもたちは少女にインタビューを開始した。しかし雇用主にその意図を知られ、報復を恐れた少女がインタビューを拒否したため、少女への報酬金額を含む今後の対策について協議していた。

また、ナイトシェルターで行われた会議では18名の参加者があり、議題は靴の購入の必要性、安全に住める場所の確保、ピクニック(社会見学)の回数を増やすことなど彼らの要望に関するものであった。自分たちの生活環境を改善するための策を自ら考えていた。

### ②労働組合

子どもたちの権利が守られていないインドでは、子どもを虐待する雇用主や警官が処罰されることは殆んどない。しかも教育の機会を奪われている子どもたちは自分たちの権利について知らされることはなく耐え忍ぶことしか出来ない。

このような労働搾取から自分を守る方法として、バタフライズは1992年に「子ども労働組合」を設立し、子どもたちの組織化を手助けしている。子ども労働組合を結成したのはインドのNGOではバタフライズが最初である。働く環境の改善を雇用主に申し立てたり、政府に政策として取り上げるよう要請する活動だけでなく、教育を受ける機会の保障、健康を守る活動も手掛けている。

実際、子どもが労働組合の会員であることを知ると、雇用主は非道な扱いがしにくいため、労働組合は労働環境の改善団体として機能している。

### ③チャイルドホットライン

チャイルドホットラインは子どもが相談の電話を受けるシステムで、解決方法を子どもたち自身で模索・決定し、必要があれば受診させたり警察や大人に知らせたりするシステムである。この活動も子どもが中心で行っている。

### ④子どもレストラン経営

子どもたちの収入の多くが食費に消えてし



写真2 バタフライズ主催のレストラン  
(筆者は中央)

まうことに着目し、安く食事が出来、社会性も身につけられるように、1990年にストリートチルドレン経営のレストランをバスターミナルの近くで始めた。12人の子どもが給仕方法や、衛生管理、時間厳守、チームプレイなどについて集中訓練を受けての開業であった。14歳の元ストリートチルドレンがアシスタントマネージャーとして働いており、子どもたちは仕事を通じて衛生観念や責任感を習得している。店内は清潔で料理の味も良く、筆者の訪問時にも大勢の地元の客で賑わっていた。

### ⑤子ども開発銀行

多くの子どもたちは貯蓄をする習慣がない。それは、所持金を警察に取り上げられたり、盗まれたりすることが頻繁にあるためで

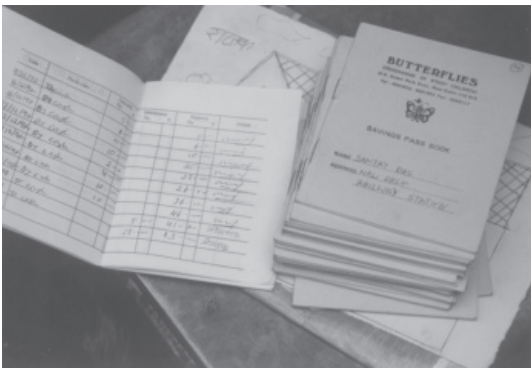


写真3 バタフライズの貯金ノート

ある。しかし、貯蓄がないために服や靴の購入もできない。そのためバタフライズは貯蓄を奨励し、子どもによる子ども開発銀行も運営していた。

### 3) 世論喚起：子ども壁新聞

働く子どもたちの境遇や待遇に関する内容を、一般人や政府に届け喚起を促すために、「働く子どもの声」という壁新聞を発行し電柱などに貼付している。この壁新聞には社会にストリートチルドレンの存在を知らせる以外に、農村から出てくる子どもたちに都会のストリートチルドレンの現状を訴えることで家出を踏み留まらせる目的もある。

しかし壁新聞は心ない通行人にはがされることが頻繁で、また現状改革の責任者である政治家などは普段車で移動するため、目に触れることは殆んど無いのが現状である。

その他、「My Name Is Today」という、子どもに関する新聞記事の切りぬきとバタフライズに関わる子どもらの調査による特集記事を掲載した資料ファイルを、発行し販売している。内容は就労に関するものだけでなく、公教育の質の低下や、それにより拡大する私立学校との教育格差を指摘するなど、幅広く社会問題に関するものとなっている。

さらに、子どもを対象とした「性的悪戯には声を上げよう」のような教育漫画冊子も発行している。それぞれ完成度は高い。

### 4) その他、子どもを守るための活動

#### (1) 健康プログラムについて

ストリートチルドレンになると居住地が確保できないため不衛生な環境での生活を強いられることが多い。また、大人たちやマフィアから虐待を受けたり薬物を接種されたりすることもあるため、健康を著しく損なうことが多い。たとえ病院に行ってもストリートチ

ルドレンと分かれると門前払いをされてしまい、適切な診療を受けることができない。そのため、ヘルスカードを持たせる対策を取っている。また、スタッフが定期的に診察・手当てをする保健活動も行っている。

## (2) ID カードの携帯

理不尽な警察の暴行の被害者にならないために、バタフライズに所属していることを証明するIDカードを所持、携帯させることを推進している。IDは役に立たない、関係無いという意見もあったが、カードを警察に見せることで暴力を振るわれなくなったという声も聞かれた。

## (3) シェルターの設置

夜間の路上で眠ることは大変危険であるため、安全を確保するためにナイトシェルターを提供している。しかし、監視体制が徹底されていないこともあり、薬物や性犯罪の温床になっていることは否めない。



写真4 ナイト・シェルター

## 4. 参加する子どもたちの声

ここでは筆者が実際に聞いた子どもたちの声を紹介する。

### 1) 活動を通じて学んだこと

・バタフライズに参加して初めて自分に、「自



写真5 コンタクトポイントに集まってきた子どもたち

分の言葉で話す」「したいことをする」「自分の権利を守る」「教育を受ける」権利があることを知った。

- ・「権利意識が自身と他者への思いに繋がる」ことにも気が付いた。私たちは、デリーだけでなく世界のどこでも問題があれば解決しようとしている。
- ・自分の意見を言うだけでなく、その意見をみんなに知ってもらうこと、みんなが耳を傾けることが必要である。
- ・壁新聞を出すことにより遠く離れた人にも自分の意見が届くことに気付き、今までは自分の苦しみでいっぱいだったが他人の話も聞けるようになり、余裕が出てきた。
- ・大人たちは子どもたちのためにいろいろな会議を開いて法律を決めているが、私たちにも参加させて欲しい。私たちの参加が必要だ。
- ・これまでの私たちストリートチルドレンの環境改善の取り組みは成功したためしはない。それは子どもに相談しないで自分たちだけで解決しようとしたからだ。
- ・大人社会との話し合いの場を持つのが難しい。

### 2) 学校教育についての意見

・働く子どもたちのための学校はない。国の

教育制度は私のニーズに合っていない。義務教育について話し合われているが、(子どもも働かなければ生きていけないにもかかわらず) 家庭の貧困撲滅については話し合われていない。教育は問題を解決するどころか貧富の差を拡大させるなど問題の一部になっている。

- ・稼ぐためにデリーに出てきたからやめた。
- ・働く必要があるから学校をやめた。
- ・僕は学校を辞めなければならなかった。それは保育所がなくて自分の弟の面倒をみなければならなかったから。保育所があれば学校をやめずにすんだ。
- ・先生の机の引出しには教える道具といっしょに、たたく道具があっていわゆる7つ道具の1つになっている。法律では体罰は禁止されているが守られていない。(公教育からドロップアウトした子ども)
- ・私も以前学校に行っていた時はうまく話せなかったし、先生が怖くて机から顔を上げられず目を見て話せなかった。(児童労働国際会議<sup>5)</sup>で発言した子ども)

参加者の中には、正規の学校に就学している子どももいればドロップアウトした子どももいる。就学しながらバタフライズの活動にも参加している子どもは「両親が学校に行けというから行っているけれど、できればバタフライズの方にのみ参加したい」と回答した。

### 3) 日常生活について

- ・稼いだお金の使い方に関して:「稼いだお金は全部親に渡す」「4~5ルピーの稼ぎは食べ物に使う」と二人が答えた。
- ・上京の理由:仕事を得られると思ってきたが仕事はない。家出したのは親から殴られたから。
- ・家の状況:父親はたまに魚を売って働いているが基本的に仕事をしていない。家族と

一緒に住んでいて、一日の稼ぎは大体20~40ルピー、少ない日もあれば多い日もある。生活していて辛いことは、母親に叩かれること、ハンカチを売らなければ叩かれる。

- ・社会において今、辛いこと:盗みをしていなくても叩かれたり、疑いをかけられたりすること。
- ・仕事としてくず拾いをしているが毎日警察に暴力を振るわれる。わずかな稼ぎを警官に巻き上げられることも頻繁だ。

### 4) 「子どもたちの声」から読み取れること

バタフライズの活動は、子どもたちに大きな変化を生じさせていた。彼らは、自分自身の権利を知り、自尊心を高め、壁新聞や評議会を通じて活動することを知った。バタフライズに参加するまでは暴力を振るわれることも賃金が不払いであることにも沈黙を守るしかなかったが、子どもの権利について学習することで不当な扱いに抗議できるようにもなった。また読み書きが出来るようになることで、理解力や判断力がついたという意見が多く聞かれた。

誰かが自分のことを大切に思ってくれていると感じることが彼らにとって心の支えとなっていることが明らかであった。

## 5. バタフライズのスタッフへのインタビュー

バタフライズの方針を明確にすることにより NGO のあり方を検討したい。

### 1) 子どもの能力について

#### (1) 代表のリタ・パニッカの見解

本来子どもたちは自分たちの処遇や選択の決定事項に「参加」する権利を持っている。従って子どもに「参加を認める」という言い方は誤りであり、参加の権利を大人たちが剥奪しているのである。子どもたちは現状を分



析し理解し表現する力を持っているが、残念ながらこれまではそれらの能力を発揮する場に恵まれなかっただけである。機会があれば話し出すのである。

子どもたちは児童労働（劣悪な環境で搾取的に働かされる状況）<sup>6)</sup>の現状について認識しているだけでなく、それらが政治や経済構造の産物であることについても理解している。実際、児童労働国際会議において、参加した子どもたちは、「なぜ、私たちの家族や労働を尊重してくれないのか」、「あなた方は仕事をやめろというが、労働条件を改善しないでそんなことを言う権利はないのではないのか、私たちにとって仕事は生き延びるための道なのだ」、「貧困を無くすための努力は何もしていないのにどうしてあなた方は児童労働を無くせとばかり主張するのか」とインドの大臣が答えに窮するような質問もした。

子どもがこのような発言をすると、先入観や固定観念によって子どもには洞察力が無いと思いついて大人は多くはNGOのスタッフが後ろで糸を引いているのではないかと疑念を持つが、それは事実と反している。子どもたちは命懸けで生きている日々の中で事の真髄を学び取るものであり、われわれが後ろで糸を引いていることは絶対にない。子どもは社会の問題を適切に分析する能力を持っているのだ。

## (2) ストリートエデュケーターの見解

子どもたちは過酷な日々の生活を通して、大人が思うより深く自分たちが抱えている問題を認識している。問題の解決策を模索するのに大人だけが話し合っても何にもならないので、子どもたちが率直に発言しやすい環境作りを目指している。このようにバタフライズでは子どもの能力を信頼し、プロジェクトはすべて子どもたちと共に考え実施してい

る。ストリートチルドレンをエンパワーするために保護・尊重・機会・参加の権利を、すなわち民主主義を保障している。子どもと、友人として対等な感覚を持って付き合うことが大事だ。

## 2) 学校教育について：代表リタ・パニッカの見解

ガンジーは「子どもたちが遊んでいるのは勉強から逃げているのではない。彼らはただ先生から環境にそれを変えただけだ」と述べている。バタフライズではこの言葉を信条に活動が続けている。インドの学校教育は上層階級の子弟のための知識偏重教育であり、押し付けが多く選択肢も少ない。子どもは経験から言葉を紡いでいく。人は本がなくても環境からいろいろ学ぶものであり、むしろ環境から学ばねばならない。知識とスキル以外に態度や価値観など物質よりも大切なものを、誰からも奪われないものが必要なのだ。

しかしインドにおいてノンフォーマル教育は正規の教育とは認められておらず、学校教育の卒業資格を持つことが定職につくための手段となるため、我々はストリートチルドレンたちが学校教育を受けられるように努めている。つまり社会のメインストリームに入りやすいように、子どもたちを学校に送ることを重要視し、就学率を高めるための努力もしている。例えば、子どもがある過程を終了した時点で「お祝い」をするなどである。実際に、祝いをすることで就学率がかなり上がった経験もある。

我々が教育で心がけていることは、子どもの特質によって対応を変えることである。勉強好きな子どもには学習の機会を多く与え、そうでなければ別の部分を伸ばすように心がけている。

### 3) 政府について：代表リタ・パニッカの見解

インドには人口約9億人のうち最貧困層は39%いるが、政府の関心は購買力を持つ7000万人の中産階級のエリート層に集中している。政府には絶対的貧困家庭の子どもたちをいかに学校に通わせるか、働く環境をいかに整えるかという視点が欠落している。

1968年の義務教育法でGNPの6%を教育に当てるべきことが表明されたが、政府は資金不足を理由に実現しようとしなかった。しかしその直後、核実験を実施した。政府は優先順位をどこに置いているのか。

子どもへの性的虐待も深刻だ。エイズの感染を防ぐために若い女性が好まれ、ストリートチルドレンが餌食になっている。女性を大切に意識をもっと浸透させることが大切である。売春を禁ずる法律でも女性を罰するのでなく女性を利用した男性を罰するべきである。この件に関して我々は、政府へのアドボカシーも積極的に行っている。

### 4) 子どもが働くことについて

#### (1) 代表、リタ・パニッカの見解

あるNGOでは、働かせずに就学させねばならないと就学促進活動を展開しているが、教育の機会の提供だけではなく、家族の問題、最低賃金を上げるなど総合的アプローチがなければ児童労働の撲滅、子どもの権利の保障などは解決されない。

いかに生き延びるかが問題であり、働くことは子どもが生きるための作戦である。働くことを禁止すれば法をかいぐらざるを得ず、より過酷な労働条件の下で働かざるをえない子どもが増える。今求められているのは、彼らの働く権利の保障とその環境の改善である。

#### (2) 元ストリートチルドレンであるスタッフの見解

(バタフライズの活動に参加し、英語も習得しスタッフとなった)

児童労働の原因は貧困である。よって貧困を解決した後に子どもの労働を禁止すべきである。子どもが働くことは必ずしもマイナスではない。働くことでアイデンティティーを確保できる。子ども時代という概念は西洋のものであり、それをインドに持ち込んで当てはめようとするのは間違っている。児童労働を即刻やめようとする団体もあるが、子どもたちは労働から様々なことを学んでいる。それに、急に労働を止めたら誰が彼らの家族の面倒を見るのか。今求められていることは労働を廃止することではなくて、労働環境の改善である。

#### (3) ストリートエデュケーターの見解

インドでは働く場をなくした子どもが買春や児童虐待などの被害者になっている事実がある。働くことを禁止するのであれば、子どもたちが必要としている内容の教育を与え、就業に結びつくようにするなど、その後の充実した策が不可欠だ。インドの貧困、暴力、政府間問題などが複雑に絡み合っている児童の就労については、包括的アプローチが必要である。デリーではストリートチルドレンが多く、12時間以上にわたる長時間労働や低賃金労働に従事している。そのような子どもたちの生きる権利、すなわちよりよい環境で働く権利を守ることが大切だ。

### 5) インタビューから読み取れるスタッフの見解と現状

スタッフは子どもの能力を信頼し子どもの目線に立った活動をしており、子どもが自ら考え、状況の改善ができるように支援してい

る。問題解決のために子どもたちへの働きかけと、子どもたちと共に行う社会・政府への働きかけがバタフライズの活動の両輪となっている。

バタフライズは子どもが働くことに関して支持の立場をとっている。しかし、いうまでもなく劣悪な環境の中で働かされ搾取される児童労働を肯定するものではない。現状を鑑みると、子どもたちから仕事を奪うことは死に等しく、さらにより劣悪な環境に身をおくのが明らかなためである。働きながら教育を受け、そして安定した仕事に就き、貧困の連鎖を断ち切れるように努めている。

子どもを主体ととらえるバタフライズの活動を通じて子どもたちは自分の権利を知り、自尊心を高め、現状の改善のために発言し行動するようになる。ストリートチルドレンの中には子ども銀行で資金を貯め、貧困と無知の連鎖から抜け出している者もいる。

一方、子どもは利根的な判断をする場合が多いことから、大局的な見地から大人が指導することも重要である。その意味ではスタッフは高い志、すなわち理念と実践力を備えておかねばならない。筆者が接したスタッフはリタ・パニッカのリーダーシップの下、それらを備えて実践していると感じられたが、人材の確保は容易なことではないだろう。方向を誤ると社会不安を引き起こすことにつながるのである。

## 6. 直面している問題

バタフライズが活動する上で直面している問題の1つは、活動資金の確保である。ナイトシェルターの運営、子どもたちに提供する教材、医療活動のための資金は不足しがちである。スタッフの中には無給でストリートチルドレンの教育に携わっている者もいた。活

動を継続させるためにもスタッフの処遇改善も重要な項目である。

2つ目は、子どもたちと継続的な関わりを持ちにくいことである。ストリートチルドレンは定住しない、できないことが多い。いつでも立ち寄れるようにと活動の場所をストリートチルドレンが拠点としやすい場の近くに設定しているが、仲間にも行き先を伝えず突然姿を消したり、また犯罪に巻き込まれて行方不明になったりと継続的に関わることは極めて難しく、生活の改善に結びつきにくい。

3つ目は、NGOなどが実施するノンフォーマル教育では明確な資格を与えられないことである。フォーマル教育の修了試験に合格することが安定した就職には不可欠であるが、そのハードルは高く受験料も発生するため、子どもたちへのインセンティブに欠ける。

4つ目には、子どもの権利が未だ社会に浸透していないことである。ストリートチルドレンは社会悪とされ、保護しケアする対象として認識されていない。市民や警察に殴打されたり、使いやすい労働力として酷使されたり、不満の捌け口の対象とされることが多い。市民のストリートチルドレンに対する啓蒙も残された課題である。

5つ目はNGO同士が相対立する構造である。バタフライズのスタッフは子どもが働くことそれ自体に対しては否定的な見方をしていなかった。就労の禁止を押し進めるのではなく、むしろ労働条件や処遇の改善を押し進めるべきだと主張している。しかし、この見解は他の多くのNGOが強調する就業の禁止とは隔たりがあるため、連携できていない。効果的な支援をするためにも各NGOの連携が求められる。

このような問題はすぐに解決できるものではなく、スタッフも日々取り組んでいるがなかなか進展しない。しかし、諦めずに解決策

を求めることが子どもたちの将来の幸せにつながるるとともにテロのないインド社会に、ひいては世界の安定にもつながるのである。

### おわりに

著しい経済発展を続けるインドにおいて、政府は政策上ストリートチルドレンやスラムの人々を存在しないものとして扱っている。しかし、実際にはそれらの人々がインドの社会の基盤を構成しており、今後さらに無視で

きない存在となるであろう。そのような状況で、社会変革、貧困の解決、人権の保障などに携わる NGO の活動はさらに重要度を増すであろう。

バタフライズの活動は子どもを権利の主体者と捉えた、先駆的活動といえる。バタフライズの運営方針の基盤は子どもの主体性の保障、子どもによる子どもの支援にあった。バタフライズの活動を今後も注視し必要な支援と策についての考察を深めたい。

### 資料1) バタフライズの教育目標

初等教育レベル 学校教育の1年生から2年生

教科	内容と教授方法
国語・言語	説明を理解するためのリスニング、話し方、読み書きの獲得を目標とする。 まずは絵を描いたり音符を書いたりして文字の形に慣らさせる。 読みはレベル別に分ける。発音も、あいまいな発音は例を出して B は BOOK の B と言うように表現する。 ゲームをし、歌いながら文字を覚えているかを試す。さいころを振って数字に当てはまるものを表から読み取り発音させる。 本は楽しむのためにあり拷問のような存在であってはならない。 左利きの子どもに対しては右手使用を強制しないよう親にも説得する。
算 数	1 から10万まで数えられることを目標とする。 より大きい、より小さい、同じの概念を身につける。 足し算引き算、4 桁それ以上のもので、位の繰り上がり、繰り下がりの概念を持つこと。 足し算や引き算などはビンのふたなどを使って遊び感覚で学習する。 計算機を使う練習、ルビーやパイサを使って小数の計算も行う。 その他、2次元の形の認識（長方形、正方形、円、三角）3次元の認識（球、三角錐、立方体円柱など）も理解する。
理 科	健康と衛生（どのように自分の体を守ればよいかを知る） 基本的な生物、植物学（植物を育てることで経験と知識を蓄積する）、物理と科学 太陽の光を利用して方角や前後左右なども理解する。
社 会	コミュニティの生活をテーマに生活環境から歴史・地理に関する題材を探す。コミュニティで生活することは責任を負うことであり、助け合うことであり、分け合うことであることを学ぶ。
地 理	気候と地形、植物、動物の関係について。国、世界の地図を見る。
歴 史	現状に起こる問題と関連づけて学ぶ。
芸 術	美術、音楽、粘土細工



## 引用文献及び注釈

- 1) 針塚瑞樹：子どもの路上生活経験と学校教育ーインド、ニューデリーのストリートチルドレンを中心にー、九州大学大学院教育学コース院生論文集4, 2007.
- 2) 国際人道問題独立委員会（日本ユニセフ協会訳）：ストリートチルドレン 都市化が生んだ小さな犠牲者たち、草土文化, 28, 1988.
- 3) Street Survivors India : UNESCO Co-Action World Terakoya Movement, 9th Cycle Application Form, 4.  
バタフライズが拠点とするのは、デリーである。デリーには約900のスラムが形成されていると考えられ、デリー在住の25%がスラムに居住していると推定されている。
- 4) 子どもたちが主体であるということは、「このストリートエドゥケーターはよくないので別の所に移して欲しい」などの厳しい意見が子どもたちから出されるところにも表れている。
- 5) 1997年10月27日から30日までノルウェーのオスロにおいて「児童労働に関する国際会議」が児童労働の撲滅に向けての方策を検討するために、ILO 及び UNICEF との協力の下で開催された。ノルウェーを含む41か国の政府、ILO、UNICEF ほかの国際機関、労使団体、NGO 他から約350人が参加した。
- 6) その仕事は、マッチ製造、カーペット織り、ガラス、金属加工などの工業分野、炭鉱・採石場などの鉱業分野、プランテーションなどの農業分野、運送業などサービス分野、家庭での労働など広範囲でみられる。ILO はその第138号条約（1973年）第2項3において、就労の最低年齢を原則として15歳とし、また、インド憲法第24条において、

「14歳以下のいかなる子どもも工場、または炭坑、その他いかなる危険な労働に従事してはならない」と規定している。しかし、インド政府の2001年の国勢調査によると、インド国内の児童労働者数は約1260万人、NGO などによれば約6000万～1億1500万人と推測されている。また農村部には、親の借金を返すために、子どもがほとんど奴隷のように働かされる債務児童労働者が多く、約1500万人いるといわれる。

インド政府は1976年に「束縛労働制度（廃止）法」を制定、1986年には「児童労働（禁止）法」を制定し、1948年の「工場法」とともに監督、起訴、裁判などによって取り締まりを行っている。しかしILOの条約勧告適用専門委員会は、インド政府当局が債務奴隷制度の廃止に対して実効意欲を欠いていると指摘している。